

パネル

中世において五輪石塔は、数多く制作されたが、私が注目したのは、鎌倉後・末期（一三世紀末から一四世紀初頭）の塔高二メートル以上の巨大五輪塔である。そうした巨大五輪塔に注目するのは、以下の理由による。まず、五輪塔には、銘文が書かれていても、風化などによって、摩滅し、読めないものが多いが、巨大五輪塔のいくつかは、文献史料や五輪塔納入物から、五輪塔を建立した人々の思想などがわかる場合もある。

また、そうした巨大五輪塔は、全国に一〇二点が所在する。とくに、鎌倉後・末期に制作された五輪塔は、数多く（七〇点ほど）残っているが、花崗岩・安山岩といった堅い石を使い、西大寺様式という特有の形式を備えているのが多い。以上のような理由から、鎌倉後・末期の二メートルを超える巨大五輪塔に注目する。

さて、その時期の巨大五輪塔に注目すると、それらの多くが中世律宗教団の手になるものであることに気づく。すなわち、大部分が、考古学の方でいう、いわゆる西大寺様式の五輪塔なのである。その様式の形態的特徴とは、以下の六点である。①空・風輪が大きい、②側面から見たとき地輪・水輪・火輪の端が縦に一直線に並ぶ、③火輪軒端の反りが強い、④空輪の幅がほぼそろい、丸みを持った宝珠形を呈し、縦長にならない、⑤火輪軒厚が比較的厚い、⑥水輪最大径が中央付近に位置する。

私は、巨大五輪塔（調査できたのは五九例）の水輪に注目し、画像処理をすると、各々、巨大五輪塔の水輪が重なるものがあり、それらが三系統に分類できることを見いだした。いずれも、西大寺末寺の律宗教団の手になると考えられる。そこ

で、律宗教団石塔の建立思想を検討してみた。五輪塔の地輪下から発掘された骨蔵器の銘文などを分析してみると、すなわち、律宗教団は、弥勒信仰に基づいて五輪塔を制作していた。弥勒仏は、都卒天で修行中で、釈迦の死後の五六億七千万年後に、この世に下生し、三度説法し、人々を救済すると信じられていた。律宗教団は、そうした弥勒信仰に基づき、弥勒下生の時まで持つように、堅い花崗岩・安山岩製の石塔を制作し、銅製の骨蔵器に火葬骨を収めた。それゆえ、五輪塔の下火葬骨とともに、死者の靈魂は眠っていることになる。こうした考えは、現在の我々の、墓の下に眠る死者の霊という考えと繋がるものであるといえよう。

実験動物供養の起こりと展開について

岡田 真美子

故中村元博士は『日本人の思惟方法』のなかで「（日本では）最も進んでいる医学者たちでさえも、実験のために殺した動物のために慰霊祭を行なう。西洋にはこういう習俗は存在しない」と述べている。基盤研究(B)「『供養の文化』の比較研究を通してみる「死」の表象の形成過程とその現代的変容」の中村生雄研究代表（当時）は、このような実験動物供養の起こりと展開を探索することを連携研究者岡田に依頼し、合わせて韓国の実験動物供養の研究者として知られていた Elmer

Veldkamp (東京大学大学院博士課程)、大上泰弘(帝人ファーマ(株)・生物医学総合研究所)を研究協力者として韓国調査班を組織した。以下、実験動物供養の起こりと展開に関する調査研究に関して報告する。

一 実験動物供養の起こり

そもそも多くの動物を生体実験に使うという手法は、近代科学が入ってきて起こったものであると考えられる。この近代科学的動物実験と、動物の命も人間の命も質的に変わるものと見ない日本の生命観との間に生じたズレから、まず医学系の研究者たちが、実験動物供養を編み出したのであろうと岡田は推察した(『いのちの倫理学』コロナ社)。岡田がこれまでに見つけた最も古い実験動物供養の記録は、九州帝國大学佛教青年會(前身は京都帝國大學福岡醫科大學佛教青年會)の活動日誌にある「大正六年(一九一七)一〇月一〇日動物祭」というものである。現在最古の供養祭実写は一九三三年東京帝國大學農学部卒業アルバムのもので、写っている位牌から大正八年(一九一九)動物祭開始と知れる。

二 実験動物供養の展開と継承される精神性

その後の展開として辿りうるのは、戦前の軍用(実験)動物の慰霊碑・供養碑である。これに関連して、植民地での動物供養がある。韓国最古の供養塔は、旧京城帝國大學付属病院に一九二二年設置された「実験動物供養塔」(現在ソウル大学病院博物館所屬)である。従来実験動物供養は日本でしか行われていないのではないかと考えられていたが、一九七三年から韓国食品醫藥品安全廳國立毒性科學院で実験動物供養が行われてい

たことがわかり、祭儀は植民地時代に建立された「動物供養之碑」の前で行われることが確認された。Veldkampは、一九三三年同じ碑の前で日本人によって供養祭がおこなわれた記録(『警務彙報三三二』)を発見した。一方大上はソウル大學獸醫學部付近に残されている「獸魂碑」の碑文(漢文)を記録していた。我々は二〇〇八年の尉(マ)魂式を初めて映像記録し、現在の供養式の発案者 趙貞植博士(前實驗動物資源室長)、現實驗動物資源課長 金喆圭博士、姜鎬一教授らから聞き調査を行った。現在毒性科學院の實驗動物供養で読まれる「尉魂文」は獸魂碑の韓国語訳であること、これらの動物供養施設が研究機関の改組の際にもその都度移管されて継承されてきたことがわかった。これらは動物供養の精神が韓国でも十分に共感を呼ぶものであったことを示している。實驗動物供養が植民地政策として日本から韓国側に押しつけられたものであったら、戦後、日帝残滓として供養碑や供養塔は取り壊されていただろうし、尉魂式も起こりえないからである。

韓国の関係者も話していたように實驗動物供養式のメインであるのは慰霊文拝読である。研究者は自らの実験を振り返って實驗動物のいのちを大切に研究したかどうかを自問し、今後もそのいのちを無駄にしまいと自戒する。この實驗動物供養が単に形式的、免罪符的な儀式でなく、実際に動物実験に携わる生命科学・技術者たちのこころを慰め、生き物のいのちを大切にすると倫理的自覚を高めていることは、日本、韓国で実際に儀式に立ち会った際にうかがえた雰囲気の厳肅さや参加者の感想からも明らかである。